

アスナ体験

のっちっの

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

気付いたらアスナに憑依してしまった一般男性！キリト君を攻略できるのか！そしてキリト君は中身男の美少女の毒牙から逃げられるのか！

目次

アスナ体験	1
強さを求めて	9
邂逅	18
おいしいって素敵	29
精神<<<<—超えられない壁—<<<<肉体	38
教訓：戸締りは大事	49
存在していた証	56
決意の末	64
愛剣	72

アスナ体験

「!!??」
「……はあ……はあ……」

……酷い……夢をみていた気がする。

それこそ夢の中で死んでしまったり、何か恐ろしいモノに追いかけて回されると言った代表的な悪夢のトップ5には入る様なモノをさらに上回る恐怖が睡眠から覚醒した頭に残っている。

(……どんな夢だった……?)

自らの生命に関わるモノより怖い夢ならばここまですぐ忘れることとはないと思うのだが、まるで最初からそんな夢などみていないかのごとく、恐怖だけを残し記憶にない。

しばらくぼんやりした意識のままでしたら違和感を覚えた。猛烈な違和感だ。

(どこだ?……?)

そこは不潔ではないが味気もないただ寝るだけのベッドが占領している狭い部屋であった。見るからに安価であろう部屋、唯一ある家具のベッドも寝心地は良くない。窓からは朝から昼の時間帯の眠気に刺すような光が燦々と入り込んでいる。

思考し始めると心臓の音が鳴り響く。それもそのはず、寝ていて起きたら全く覚えのない場所にいるのだ。あまりの不安に身体中の血液が一気に凍った気がした。

誘拐? なんの取り柄のない俺を誰が誘拐するのだ。誘拐つてのは富豪だったり、優れた人物だったり、人に恨まれる人物にあるイメー

ジで、平々凡々の自分に起きるはずはないだろう。

ドツキリ？何のために？俺は芸人ではないし、自慢ではないが友達も少ない……。いや！少ないだけだから！全くの0じゃないからね！勘違いしないで！

……ゴホン！で、では……

……では……異世界転移？……それこそありえない。創作物としてはありふれているが現実になんか起こるわけない。あまりに非科学的過ぎる。それならばまだ誘拐の方が納得がいく。

まあ、まずは部屋から出てみるか。現状把握しなければ。

誘拐犯も近くにいなさそうなので、恐る恐る寝ていた体を起こす……。と……。??頭が重い？というより頭皮を軽く引つ張られてる……。ような？

……

……

……

……、髪……長すぎない?!なんだこれ!?

そこにはさらさらとした滅多に見ないほど綺麗な栗色の髪があった。普段であれば見惚れていただろう、自分の頭から生えていなければ。

嫌な予感がする……。確認のため身体中を弄る。

ふにゃん。つるん。

い、いやいや(笑)
んなわけない、非科学非科学ww

これは胸部が腫れてるだけ。そして知らぬ間に去勢されてただけ。

……い、一応確認するまではわからない。シユレディンガーの猫だ。確認するまではこの限りなく女性に近い身体でも男の場合と女の場合があるかもしれない。

いや、きつとそうだ！おそらく、寝ていたら外で事故かなにかが起き意識不明、そして治療のため簡素な部屋型治療カプセル？みたいなもので治療していたのだろう。

ならば髪が伸びているのも納得だし、悪夢を見て寝汗の一つもないのも高性能カプセルなら理解できる。

……治療のため去勢、後遺症で胸部の腫れは、まあ、うくん、よくわからないが必要だったのなら仕方ないのかもしれない。うんうん、この線かな。

そ、そうだ！鏡はどこだ?!鏡に写せば顔はパツとしない男俺が映るはずだ。

深めの現実逃避をしながら鏡を探すもベッドしかない部屋には何も無い。残念なような、ホツとしたような複雑な気持ちで見えた。

見てしまった。

窓ガラスに映る自分女の子を。

綺麗な栗色の髪、はしばみ色の瞳はパツチリしていて愛らしい。大きすぎず小さすぎない乳房は明らかに就寝用と思われるシンプルなキャミソールに収まっており、同じくシンプルなショートパンツからは今まで人生で見た中で最も美しいと言っても過言ではない美脚が通っている。

端的に言おう。女の子T Sになつてる。

……そしてその瞬間、さらなる問題が発生した。誘拐（間違い）や去勢（なくなつたが間違っている）諸々で、人生でこれ以上驚くことは金輪際ないと思つたのが秒で否定された。

……窓ガラスに映る女の子の姿に既視感がある。

……あー、まあ、そのく

「アスナやん」

窓ガラスに映るアニメで見たSAO《ソードアート・オンライン》の

【正妻】と呼ばれる堂々たるメインヒロイン。

【閃光】のちに「バーサクヒーラー」と言われるほどの傑物。

アスナこと結城明日奈が瞳をまんまるにして驚いていた。

…そろそろ向き合わなければならぬ。

まずアスナになったとわかったときに一番はじめに考えなければいけない問題は、現在はアスナに転生したのか、憑依しているのかだ。転生だとしたら自分アスナなのでなにがどうなっても最悪大丈夫だが、憑依だとするとなんらかの要因で明日奈の意識が表に浮上していないだけなので言動や身体を自分以上に大切にしなきゃいけない。

(んー、前の記憶がないということは憑依の可能性が高いかなあ)

大抵は前世を思い出す系転生は、転生体のそれまで生きていた記憶を継承、あるいは融合して昇華している場合がほとんどだ。かなり大穴でアスナ(17歳)の体に神様転生し、その際の記憶を消された説もなくはないが、違ったとき間違いなく後悔するし、取り返しがつかないかもしれない。

明日奈はかなりエリートの家で生まれ本人も様々なジャンルの知識知り得ている博識エリートだ。

流石に平凡を地で行く俺には無理だが、アスナ雰囲気ロールプレイならまだ出来そう…多分…メイビー。

後はアスナが俺のせいで劣化版になってしまったことで、主人公キリトの死によるバッドエンドの危険性もあるだろう。

原作キリトは高い仮想世界適正を持ち、その天性の才能と本人のゲーマー気質で、デスゲームを開発した諸悪の根源でありゲーム内でもチートキャラを倒すなど、冗談抜きでキリトがいなきやクリアは不可能だろうキャラクターだ。

そしてその主人公はアスナの影響をかなり受けておりアスナがい

たからこそ、本来ある100層までいかないと開放されないのを75層でクリアという快挙を成せたと言っている。

つまり、アスナ（完璧）がアスナ（ポンコツ）になることでSAOに囚われた1万人（現8千人）が丸々逝っちゃうことになる可能性があるのだ。

これはヤバイ。なにがヤバイって自分だけが自覚している1万人分の重石を背負っているのだ。

バーチャルなので胃に穴は開かないが常人ならストレスマツハだぞ…

キリトはソロを貫くのか、ポンコツアスナが相棒となるのか、サブヒロイン達がパートナーの座につくのか。

それはわからないが、パートナーになるにしろ、生き残るにしろ最低限度の強さは必要だ。

今後、一般プレイヤーを害するオレンジプレイヤーや、あまつさえプレイヤーを^{殺害}キルするレッドプレイヤーなども出てくる。狡猾で卑怯な彼らは、純然にクリアを目指す最強集団たる《攻略組》すら手こずる。

生き残るなら攻略組以上、パートナーとしてはキリトに並ばずとも支えることが出来るほどに強くならねばならない。

強く… ならなきゃ。

それは平凡な中身に対して不釣り合いなほど強い光。
高潔な身体に影響されたのか、手に持つ《アイアンレイピア》に映
る瞳は決意の光に満ちていた。

強さを求めて

このデスゲームの舞台である100層のフロアからなる鉄の浮遊城《アインクラッド》は1層目が最も大きく、直径10kmの円形をしている。

1万人が余裕で入る広大なフロアの攻略には原作で1カ月丸々要した。

その一層のフロアボスで《イルファング・ザ・コボルドロード》と呼ばれる獣人の王との戦闘はアスナとキリトを語る上で避けられないほどのイベントである。

原作ではアスナはキリトとボス攻略の臨時パーティーを組んだことで絆を結び、最終的にきやつきや、うふふ、あらあら、まあまあを経験していく。

そのイベントがゲーム開始から1カ月後。

そして今現在は約2週間が経過し、残り3週間もないだろう。その限られた期間内でトッププレイヤーレベルまで強くならねばならない。

原作アスナはゲーム開始から2、3週間経過し外部からの救助が来ないことを悟り、始まりの街の宿に籠るのをやめて、かなり無茶なレベリングを行い、キリトに次ぐほどの持ち前の才能と強い意志でボス戦で活躍をみせた。

……この身体はアスナだが、中にいるのは普通の凡人だ。同じ身体なので才能はあるはずだが、意志力に関しては……自信はない。それでは、ダメなのだ。

弱い意志のせいでキリトの足を引っ張るなどあってはならない。

ならば……意志の力を上回るほどのレベルにするしか方法は無い。

原作では安全マージンと呼ばれている、安全性を重視する攻略のためレベルは階層数+10レベルだと言われていた。

原作キリト君は一層突破した時点で13レベルのはず。

… 20は流石に無理かもしれないが15ぐらいは上げたいところだ。

廃人レベルのゲーマーである主人公様よりレベルを上げるのならば…こんなところで考えてる暇はない。

××××××××××××××××
そうと決まれば…

××××××××××××××××
いかにも初期装備だと思われる動きやすい服を着て古めかしい見た目の石造りの宿屋からだと、中世ヨーロッパらしい街並みが広がっていた。

アニメとかではよく見た光景も実際に見て感じると迫力がある。一種の大規模テーマパークの街並みのようでそれよりも生活感がある。街が生きているのを実感できた。

「あの、すみません。道具屋さんがどこにあるかご存知ですか？」

俺はあるモノをゲットするべく、置かれているであろう道具屋の場所を道行くNPCのおじさんに尋ねた。すると何かに驚いた後快く教えてくれた。

ん？どうして驚くのだろうか？

「それにしてもあんた、えらいべっぴんさんだね。街の外に行くなら気いっけなよ」

ニコニコとそう言い手を振りながら去っていくおじさんに愕然とする。

（そうだった！アスナはSAOで5本指に入るほどの美少女だった！）

それは先程TSしたて故の無自覚。

道理で通行人からチラチラ見られている訳だ。だからアイテム欄にフード付きローブがあったのか。服装が変なのかと思ったが顔の方か…。

すぐさま深紅のローブを着けフードを被る。目立たない色が良かったのだが黒や灰色は嫌だったんだろうなあ…と本来のアスナの片鱗を垣間見て恥ずかしくも嬉しく思うのだった。

目的のブツは道具屋の脇にわかりやすいように置かれていた。鼠マークのガイドブック《エリア別攻略本》である。

これは凄腕の情報屋である《鼠のアルゴ》がマップやモンスター、クエスト発生場所やその解説等々をまとめてある優れものである。レベリングをする前にこれがどうしても欲しかった。

ちなみにお値段0コル。先行投資組に感謝だ。

これがなければただ闇雲にモンスターを倒すだけで効率の『この字もないレベリングになってしまう。』

そこからはあまりよく覚えていない。

街を出た。

早速出会った青い体毛のイノシシ《フレンジー・ボア》は非アクティブモンスター

プレイヤーが攻撃しなければ襲ってこない。

《リニアー》の練習：不発。

反撃してきたのでスキル無しの攻撃で普通に倒した。

再度、挑戦。

切っ先を意識して捻るようにまっすぐ突く。

… 成功。喜んでいる時間はない。

森の入り口付近でイノシシを倒していると出てきた《ダイア・ウルフ》フ 獰猛な狼だ。

《リニアー》の敵ではない。

倒す。倒す。倒す。倒す。

森の奥から50cmくらいのでっかい蜂ブリックワスプが出てきた。

予想以上にキモいので早急に倒す。

倒す。倒す。

黒パンを食べた。固くてもそもそも美味しくない。空腹感を癒すためだけのもの。

スレート・ポア
白いイノシシがでてきた。HPが多く表皮が堅い。黒パンの固さを思い出して若干イラつきながら強引に倒す。その分経験値が多い。

村に着く。手っ取り早く終わるようなクエストを片っ端からこなす。

すぐさま出発する。

なんか高い人工物がある。これが迷宮区か。

そこでは仮にも人型のモンスター、獣人《ルインコボルド・トルーパー》が手斧を持ち襲いかかってくる。

……何日経った？

黒パンは数日前になくなった。デバフが出るほどの空腹感も疑似的に作り出されたモノと思えば問題ない。

武器も何本も壊れた。在庫があるなら問題はない。

……なんでモンスター殺してるんだっけ？頭がうまく働かない。ほぼ反射で対応できるので問題はない。

久方ぶりにメニュー画面を表示する。『2022. 11. 30 (WED) PM 2:49』

……12月になるまでに何かしなければいけないはずなのだが、……

……何にせよまだ半日あるんだ、殺し続けたらいいだろう。

明日は明日の自分に任せろ「ザリツ」………コロス。

背後から砂を踏み締める音が聞こえる。

振り向くと同時に先制を取るためにレイピアを構えて駆け出す。

単体か、楽勝だ、足を攻撃し体勢が崩れたところを首筋に《リニア》を数回叩き込めば楽に…

………そこには見たことのある中性的で整った顔立ちの男の子が唾然としていた。

17

オワッターー

アスナ^俺は気を失った。

邂逅

流れ星を現実世界で一度だけ見たことがある。

そのときはネットゲにどっぷり浸かっていたため、願ったことはロマンチックの欠片もない『次のモンスターがレアアイテムを落としますように』という、ゲーマー以外が聞くと顔をしかめてしまう内容だったが……。

そして今、現実世界と近いようで遠いこの仮想世界で二度目。それは迷宮区の薄暗い中眩いほどの光。ソードスキル特有のライトエフェクトだ。

流れ星を幻視させる原因を作っているのは小柄な深紅のフードを装備したプレイヤーであった。ちょうどモンスターとの戦闘中である。

一言で言うなら苛烈の極みであった。圧倒的なスピードで迷宮区ここでもかなりの強敵であるコボルドの上位種を反撃の隙すら与えず真っ正面から対峙していた。

コボルドが前に進もうと脚を出そうとする瞬間にはすでにコボルドの脚をレイピアの切っ先が瞬く。

攻撃しようとする無骨な手斧を振り上げると正確な狙いの『リニア』がコボルドの手首を穿つ。

体勢が大きく崩れたコボルドの頭・首元や亜人種によくある股座等のウィークポイントに怒涛の攻撃を見舞っていた。

本来ソードスキル後は少しの硬直がある。細剣カテゴリの基本スキル『リニア』はその硬直が他の武器カテゴリのスキルより少ないのが強みであるが、モンスターの一挙手一投足に対応できるほどでは

ない。

いや、計算上はできるかできないかと言えば可能なのだが、人間は動きが少しでも止まるとリズムを崩して多少の隙ができるものだ。

例えば、全力疾走中に金縛りが起こったとすると、体が自由になった時、瞬時になんの違和感もなく元の動きに戻る人間がどれだけいるだろう。

それは数多の経験からのモンスターの行動予測と、《リニア》を主体にした硬直を感じさせない完璧とも言える体捌きからなる理想的な戦闘であつた。

モンスターとのレベル差が大きいからできるのだろうか、文句なしの神業である。ベータテスト期間を含めこれほどの完成度のソードスキルを見たことがなかった。

…… 多少の違和感があつたが。

(何を变に感じたんだ…?)

違和感が拭えなかつたが、いいものを見たところの場を去ろうとしたが…

神業を魅せたプレイヤーの背後の薄暗い通路から子供サイズの影が飛び出す。

(!!あぶな……っ！)

背後の愛剣《アニールブレード》を手に掛ける。

間に合うかッ?!

あまり他プレイヤーには関わりたくなかつたが、見てしまったもの

は仕方がない。助けるべく今まで使用していた《ハイディング隠蔽》を切り、全力で走ろうとしたとき…

赤フードのプレイヤーはまるで後ろに目があるかのように間合いにいったコボルドの斧を身体を捻るように躲した。見ているこちらがビビるほどにギリギリだったが不思議と当たるイメージが湧かない。

不意打ちを躲されたコボルドは戸惑う素振りをみせたが、そのプレイヤーはそんなわかりやすい隙を見逃さなかった。

コボルドのガラ空きの後頭部に容赦ない《リニアー》を叩き込む。

ゴオツ!!

レイピアで出してはいけない音が鳴る。クリティカルだ。

コボルドのHPを半分削る。

衝撃で転げ回ったうっ伏せのコボルドが起き上がろうとする下半身を脚で踏みつけ、再度後頭部に《リニアー》を放つ。

ゴツ… キン!!

またもクリティカルの音と同時に、剣先が破壊不可オブジェクトの迷宮区の床に当たってしまったのか、それとも単純な耐久値の問題か、武器が破壊した音が鳴り響く。

…もはや戦闘ではなく暴力だ。モンスターに同情してしまうほどである。

哀れなコボルドのポリゴン片が虚空に舞う中、武器が壊れたのになんのリアクションも見せず淡々とイベントリから替えのレイピアを装備するのを見て…

俺は……

無意識だった。無意識に後退りしてしまった。

なんの問題もなかったはずだ。
《隠蔽》を切ってさえいなければ。

その瞬間、溢れんばかりの殺気を感じる。
身体中が総毛立つほどの感覚の後、赤フードのプレイヤーが新品のレイピアを構えこちらに走り出した。

(プレイヤーキラー
PKプレイヤーなのか……?!)

PK (プレイヤー・キル) というのはMMORPGでは一般的に知られているが、仮想世界の死が現実とリンクしているSAOではその意味合いは極端に変わってくる。

赤フードのプレイヤーのあまりの速度に、反射的に《アニールブレード》を防御型に構えるしかできなかつた。

互いの距離が近づき、顔が目視できようようになる両者の剣の間合いに入ると、両者息を呑むと共に、赤フードの凄腕プレイヤーの動きがとまる。

一方は凄腕プレイヤーが超が10個は優に付くほどの美少女であつたからだ。

SAOの開発者でこのデスゲームの首謀者の行いでゲームのプレイヤーの見た目が現実と同じものになつてしまった今、SAOのプレイヤーは女性割合が限りなく少ない。

ネカマや好んで女性アバターを使う男性プレイヤーがふるいにかけられたことでモロにネットゲ界隈の男女比になつている。

元々ネットゲ界隈の女性プレイヤーの少なさ+容姿が優れている割合により、女性の美系プレイヤーの数は絶滅危惧種レベルになつている。

あれほどの鬼神の如き強さを魅せたプレイヤーがまさか女性の、さらにレアな美人だとは思わなかつたためである。

そしてもう一方は……モンスターと思つたらプレイヤーで、そのプレイヤーはこのゲームの^{救世主}主人公で、さらに彼に未遂とはいえ攻撃を仕掛けてしまったことで動揺してしまつたからだ。

はしばみ色の瞳と目があう。その綺麗な宝石のような瞳は丸々と見開かれ揺れ動いていた。

心なしかアバターの顔色が悪くなつていく。

「……おい、あんた。なんのマネなん……っ?!おい!」

警戒しながら文句を言おうとすると、その女性プレイヤーは一度大

なる。

超絶技量に対し不気味なほどのチグハグさ。

攻略中にスピアごと手持ち全てが壊れたならばまだ理解できるが、最初から防具なしで迷宮に潜ったのだとしたら…

なぜそんなに生き急いでいるのか…

この可憐な姿の奥にはなにがあるのか…

自らの生命を燃やしながら輝く流れ星を

俺は

勿体なく思った。

「くしゅん」

時刻が夕方に差し掛かり肌寒くなってきた頃、隣から控えめなく

しやみの音がした。

「…起きたか？」

どうやら隣の細剣使いさんからのようだ。

隣を見ると彼女の瞳がぼんやりとこちらを見返してきた。

しばらくそのままにしていたら目の焦点があった。

「ッ!!」

その瞳に映るのは驚愕と恐怖、ほんの少しの光。

「…どうして…」

美しい姿に変わらず声も美しかった。

「ん？ああ。あんたが迷宮区で突然倒れたから「違う!」…？」

必死に問う彼女は疑問と怯えに満ちていた。

(VRで気絶したことで心配してたが、記憶は問題なさそうだ…)

自分でも妙なところに関心を持ったが、続けて彼女が問うた。

「どうして…っ…攻撃しようとした…私を…助けたの…？」

「あーそっちなか…正直に言えば勿体ないなって」

「それは…マップデータが…？」

マップデータか：．．．確かにかなりの深さを潜っていたマップピングされた彼女のマップデータはかなり価値があるだろう。普段の俺ならそれも理由にするだろうが今回は：．．．

「それもあるけど、あんたみたいに強い奴がこんな場所で死ぬのかと思っただら勿体なく思っただね」

この輝きを見てみたくなった。

この子は間違いなくこの鉄の城に囚われた1万人の光となり得る。そんな逸材がこんな誰も知らない薄暗い場所で燃え尽きるなんて：．．．．．悔しく思ったからだ。

：．．．この返答は彼女のお気に召さなかったようだ。ここで気を利くことを言えたらいいのだが、いかんせんなにも出てこない。

彼女が暗い顔のまま続ける。

「そう：．．．ですか：．．．。助けていただいて：．．．ありがとうございます。た：．．．。お礼は：．．．。何がいいですか？」

お礼が欲しくて助けた訳ではないが：．．．。いらないと言っても納得しないんだろうな。

「それなら：．．．迷宮区のマップデータをくると助かる」

「はい、わかりました」

彼女からマップデータが送られてくる。迷宮区どころか1層全体のマップを送ってくる：．．．かなり歪な軌跡だ。始まりの街から一つ

の村に寄っただけの迷宮区までのほぼ一直線しかクリアされてないマップ、それに反比例する様に迷宮区の塔の1階から17階まで隅々までマップピングされている。

.....

「なあ、フェンサー細剣使いさん」

「... どうかしましたか？」

「これからどうするんだ？」

「..... まだ目標レベルに達していないので...」

「また潜るのか？」

「.....」

「ついさっき気絶したのにな？」

「.....」

黙りこくるその姿は迷宮区内での苛烈さと打って変わり、まるで進むべき道がわからない迷子のようにだった。

確信はないがここで彼女を行かせたら二度と会えない気がする。

はあ...

「あんたもゲームをクリアするために頑張ってるんだろ？無駄に死ぬためじゃなく。なら、『攻略会議』には顔を出してみてもいいんじゃないか？」

ピクリと彼女の肩が動く。

「…………… 攻略会議……………」

「12月2日………… 2日後の夕方に迷宮区近くの《トールバーナ》の町で、1回目の《第一層フロアボス攻略会議》が開かれるらしい」

「2日後……………」

んんー、期間を出したのは失敗か………… まだ行こうとしてる。

「あんた《トールバーナ》までの道知らないだろ？」

先程の彼女のマップデータから知り得た情報だ。

「案内するよ、どうせボスに挑むなら体調は万全にしとかなきゃ、パーティーの足を引っ張るはめになるぜ？」

………… 何に反応を示したのか彼女の肩の力が抜けた。

よし！説得できたようだ。

そうと決まれば、立ち上がり外していた片手剣を背中に装備し直す。

「行こうぜ、もうすぐ日が暮れる」

「………… ええ」

そうして俺はレイピア使いの危なっかしい同行者がきちんとついてきてるか時折確認しながら、《トールバーナ》への帰路につくのであった。

おいしいって素敵

迷宮区の最寄りの町である《トールバーナ》は始まりの街を除くと一層で最も栄えている。とは言っても巨大な風車塔が立ち並ぶ、のどかでゆったりとしたこの町は端から端まで200mぐらいであるが。

町・・・というには少し小さい気がするがゲーム内の町と思えば納得できる。

そんな町にある細剣使いと盾なし片手剣使いが到着したのは周囲がすでに暗くなってからだった。

(失敗した失敗した失敗したっ！)

無事に町に着きホツとした片手剣使いの後ろでトボトボ歩くアスナは負の感情に苛まれていた。

原作アスナは事情がどうあれ自らの生命を顧みない自暴自棄じみた行為を後悔していたが、今のアスナはそんなレベルではない。

(・・・よりもよって主人公に攻撃を仕掛けるなんて!!)

まだ限界ではなかった・・・はずだ。誤って攻撃してしまったのが他プレイヤーであればすぐ謝罪をして狩りに戻っただろう。

吐き気を催すほどの睡眠欲も、腹が痛むほどの空腹感も、身体を蝕むありとあらゆることは偽りの電気信号であり、点滴に繋がれているであろう現実世界の身体に異常をきたすものではないと認識すれば、数日我慢すれば後はなにも感じなくなっていた。

意識は朦朧としていなかった。逆にこれ以上ないほど冴え渡っていたと思う。今の自分ならなんでも出来る気がしていたのだ。

……… 実際にはこの状態はランナーズハイという結構危険な状態だったのだが。

いくら薄暗いからといえ、そんなことは理由にならない。

俺の1つの、しかし重大なミスのせいで原作が壊れてしまった。

最初から全く同じ展開にはできないとは思っていた。アスナとアスナは違う。だが劣化版だとしても精一杯やり抜き、それでもクリアできないのなら仕方がない……と若干の諦めを感じていた。

しかし、…… 考えうる中で最悪の事態だ。キリトと敵対関係になつてしまう可能性も充分にある。

キリトであれば仮にアスナがいなくともどうにかするかもしれない。

だが……… だが万が一、原作とは大きく異なつたことで主人公の身に何かあれば……

「……………サーさん？」

1万人の命も、止められるはずのある男の陰謀も、硝煙舞う世界のある少女の未来も、その先もその先もその先も、俺のせいで……

「細剣使いさん！」

「っ!？」

誰かに肩を掴まれる。キリトが心配そうにこちらを覗いていた。

「…どうかしましたか？」
動揺をなるべく隠して尋ねる。

「……何か考えてたようだけど、町に着いたから声を掛けたんだが……」

…いつの間にか《トールバーナ》の門の前にいた。考えるのに夢中で気づかなかったようだ。

「…そうですか、案内ありがとうございました」

「会議は2日後の午後4時から中央広場で開かれるらしい」

「わかりました……」

「会議に向けてこの町にかなりのプレイヤーが集まってるだろうけど、あんたは宿のアテはあるのか？」

……

「ええ、大丈夫です。お気遣いありがとうございます
今できる渾身の笑顔を見せて答える。」

…アテなんかない。これ以上迷惑を掛けたくない。

「…そうか、なら一つだけ、いくら避けるのが上手くても最低限の防具はつけたほうがいいぜ」

「…ご忠告感謝します」

攻撃してきた相手にも助言をする優しい主人公が、アスナをどんな目で見ているか知るのが怖くて……頭を下げすぐさま踵を返す。

「……」

その小さな後ろ姿を見る片手剣使いの眼差しは、憂いを帯びてい

た。この世界は現実の四季や気候が反映されており、今日は比較的暖かい日といえど、日が暮れた12月前後はかなり寒くなる。

白い息を吐きながらアスナは街灯の光が辛うじて届いている路地裏のある街路樹の下に腰を下ろした。

その手にはこの町で買った道具屋の最安の黒パンを持っていた。

(…寒い)

パンを買った道具屋で一緒に毛布でも買えばよかったと少し後悔しながら、無意識に白い息を手に吐き掛け擦り合わせる。

この数日の狩りで出たモンスターの不要なドロップ品を道具屋で売ってかなりの金額を稼げた。

それはゲーム序盤の1層といえども、かなり良い食べ物を買っても懐は痛まないほどであったが、他の食べ物を探す気力がなかった。

数日ぶりの食事だというのに手が進まない。

始まりの街にいた頃とは比べものにならないほど上がったステータスを持ってしても固い黒パンを、苦勞して一口大にちぎり無理矢理にでも口に運ぶ。

びつくりしすぎて素で恩人^{キリト}に毒を吐いてしまった。

「無理に敬語にしなくていいよ。……あと状況的にはそう思っても仕方ないけど全力で否定させてくれ……」

キリトは少し傷ついた顔で苦笑しながら隣に勝手に座る。

「このパン、毎日一個は食べてるよ」

「……」

「……信じてないな？まあ、ちよつとは工夫するけど」

「……？」

キリトってこんなにコミュ力あったっけ？俺が知るキリトはコミュ障でかなり親しくならないと気軽に話しかけてこないような人物だった気がするが。

……… 実際は心配でこっそりついてきたキリトが、細剣使いがパンを一口食べた後動かなくなったから、話題振りに手頃な食べ物^{ポッコ}の話^{ポッコ}を振っただけなのだが、キリト以上にコミュ障の細剣^{ポッコ}使いには凄く思えた。失礼な言い方をすれば小学生の低学年が高学年の生徒に憧れるようなものである。

キリトはおもむろにメニューからアイテムを取り出し使用した。出てきた小さな壺型のアイテムを見たときに思い出す。

(これって… クリームパンイベント…！)

クリームパンイベントとは原作でも味気ない黒パンで一人飯していたアスナさんの元に来たキリト君が提供した、クエスト報酬の食材アイテムであるクリームを付けたパンをアスナさんがめちやくちや気に入るイベントのことである。

キリトは指先に纏った仄かな紫色の光を新たに取り出した黒パンに付ける。

すると付けたところから見るからに濃厚なクリームが現れ、たつぷりとクリームが付いたパンを大きな口でかぶりついた。

もつぎゆもつぎゆと音が出ているかのような食べっぷりに…

「……使ってもいい…？」

「ん？はあ、ひいほ」

俺は置かれた壺型アイテムをタップして、指先に纏った光を手元の食べかけの黒パンに付ける。その一回で使用限度に達したのかアイテムが粉々に砕け散る。

手の中のどっしりとしたクリームが乗ったパンを見ると懐かしい感覚を覚えた。

脳が命じるままに小さな口を懸命に開け頬張る。

その瞬間、身体が震えた。

このときに初めて生を実感する。… 流石に大袈裟すぎたかもしれないが、

だが、

「フ、フェンサーさん?!」

キリトが驚きの声を上げた。

気づくと両眼から溢れんばかりの涙が流れた。慌てて拭うもの拭いた側から溢れる。

「…っ! あれ?…っ… おか… しいな… 止まらなっ… どうして…」

その姿を見たキリトは咄嗟に前々から考えてたことを口に出す。

「… なあ、フェンサーさん。泊まるここないんだろ? もし… もしも… 嫌じゃなければ… うちに来るか?」

「……………っ……………」

それはコミュ障の精一杯の勇氣。見るからに誘い慣れていない感丸出しであった。

さて、その結果は、

「……………っ……………それって……………ナンパ……………?」

「ち、違っ「アスナ」……………え?」

「私の名前、フェンサーさんじゃない。アスナ」

「……………俺は……………キリトだ……………よろしく……………?」

「うん、よろしく……………キリト君」

その慣れておらずキョドってる姿が、なんだかおかしくて、可愛らしくて、

久々に笑えた気がした。

いた。
曰く、二階建ての農家の上階である。二つ部屋あり、窓からの眺めもよい。新鮮なミルクがいくらでも飲み放題でのんびり足を伸ばせるほどの風呂も付いて1晩80コルだとか。

確か原作のアスナは頭に超絶が付くお風呂好きである。

そもそも仮想世界では基本的に汚れない。土汚れなども数分もすれば跡形もなく消える。風呂に入るのは気分以外のメリットはない。

VRに囚われてから1ヶ月間も大好きなお風呂に入れていない状態のときに、キリトに風呂の存在を教えられ、葛藤の末に恥や外聞をかなぐり捨ててキリトの部屋へ入浴に行ったイベントがある。

元々俺は風呂が面倒でいつもシャワーを浴びて済ましていた質で、そんな中身の俺が入ったアスナがどうなるかわからないが、

まあ、クリーム乗せパンのときのような失態はしないだろう。
もし同じように感情が暴走したところで扉は付いていたはずだし、ましてキリトと入るわけではない。

……
あれ？今、風呂に入ることを自然に考えていた……？

原作でキリトの人柄を知っているとはいえ、会ったばかりの人の部屋で？

もしかして…今のアスナ^俺ってかなりチョロ「着いたぜ、ここだ」
暗い道をキリトの白い呼気が霧散するを見ながら歩いていると、不
意に彼の声がかかる。
いつの間にか目的地に到着していたようだ。

それは《トールバーナ》の東に広がる牧草地沿いに存在していた。
敷地の脇にはきれいな小川が流れていて、そこに設置されている水
車が絶え間なく回り続けている。
昼間ならさぞ素晴らしいのどかな風景が広がることだろう。
その敷地の真ん中に立っている母屋はかなりの大きさだ。

1階を通り不揃いの無骨な階段を上がると先に進んでいたキリト
が扉を開けた体勢のまま入室を促していた。

「どうぞ」

「…どうも…」

いざ入ると部屋の広さが当初の想像の倍はある。

始まりの街の宿の一部屋と天と地の差である。
それもそのはず一目で大きいと感じる建物の2階を丸々使ってい
るのだ。

(この一部屋でビジネスホテル何室分?!… 5… 8… 10…
もっと?!それが二部屋あってさらにお風呂場も…)

頭の中で始まりの街の宿50コルとこの部屋80コルがリフレイ

ンする。

原作でのアスナも驚いていたが……同じ道を辿るとは……別にこんなことは似なくていいのに……。

背後で扉が閉まる音が聞こえてくる。

そのままキリトは部屋の隅にあるワゴンの上の大きめのピッチャーからグラスに新鮮なミルクを2つ注ぎ、玄関前にある机に乗せソファアーに座る。

向かいにある見た目より座り心地の良いソファアーに座り、飲み放題らしいミルクを飲む。

さっぱりとしながら十分なミルク感があってとてもおいしい。

「アスナさ」さん付けはいらない」……ア、アスナ……明日のことなんだが」

「ええ」

「防具を買った方がいい。前も言ったが流石にそのままじゃ危険すぎる」

「…………… ついてって……くれる？」

「幸い、こちらへんは迷宮区に近いこともあって、現時点でかなりいい防具が……へ？」

「…………… コホンツ…………… なら、防具屋さんの場所と、キリト君から見てオススメってあるかしら」

「？あ、ああ、まずアスナは典型的なスピードタイプだから動きが阻害されないような……………」

……
……
話を詰めていく。
……

……と、まあ、そんなところか。他に聞きたいことはないか？」

「キリト君は明日どうするの？」

「俺か？俺はやり残したクエストをこなしてくるよ」

「……私も……」

「……君は休んでいて欲しい……少なくとも攻略会議までは」

その善意しかない目に何も言えなかった。

「……わかった」

「すまない、命令するようで……」

慌てて首を振る。

「謝らないで、恩人に頭を下げられるほど私は恩知らずじゃない……それにあなたが私を想って言ってくれていることだもの、従うわ」

キリトは安心したように肩の力を抜きながらミルクを飲み干す。

「なら今日はこちらだ、アスナは向こうの部屋のベッドを使いなよ」

「… キリト君は？」

「俺はここでいいよ」

キリトは自らが座っているソファアーを指差す。

その大方予想できたセリフに異論を返す。

「それはダメ。ここはあなたの部屋なのよ。私がここで寝る」

「君は休むべきだと言ったはずだ」

しかし、立場的にも状況的にも相手の方が圧倒的に有利だった。

「……………」

「はあ、… わかってくれ、女の子をソファアーに寝かせて自分だけベッドで寝るわけにはいかないんだよ…」

その気持ちも理解できた。

「… 恩を感じてくれてるなら俺の顔を立ててくれないかな？」

チェックメイト、詰みだ。

「… そうね、わかった」

「……ね、ねえキリト君」

アスナ^俺のグラスの底が見えてきたところに覚悟を決め切り出す。

メニュー画面を操作してなにかをしていたキリトはそれに気づかず返事した。

「ん？どうしたんだ？」

「……凶々しい頼みだとは思っただけど……」

その重苦しい声色に異変を感じたのか、メニュー画面から顔を上げたキリトが見たのは、

全身からプレッシャーを放つアスナであった。

「?!お、おう」

いきなりの状況に吃^{ども}つてしまう。

「……あ、あの……」

さらに様子がおかしいことに疑問が浮かぶ。今のいままで言いたいことはズバズバいうアスナが言い淀むのは付き合いが浅いキリトでも違和感を覚えた。

「……ろ、……いい……?」

「え？なんだって？」

「だからッ！…その…使わせて…ほしいの」

「…なにを？」

「…………ろ」

???

「お…ろ…！」

おろ？

「…………お風呂！お風呂を使わせてほしいの!!」

最初はお風呂を借りるつもりなんてなかった。

××××××××××××××××××××××××
まだ、リビングに入ってから壁一枚挟んだところにお風呂があると
思うと…………

何故かソワソワしてしまい、いてもたってもいられなかった。

恥ずかしさから赤面しながら後ろ手にバスルームの扉を閉める。

鍵は…掛けれなさそう。仕方ない。キリトは覗きをするような
性格ではない…それより今はこの謎の衝動を抑えることが重要
だ。

お風呂場は中世風の農家の2階とは思えないものだった。

北半分は脱衣所で壁には荷物置きと思われる棚が作り付けてあり、床には分厚いカーペットが敷かれている。

そして南半分は石を磨いたタイル敷きで、その中央に映画でしか見たことのないような白い陶器のバスタブが占領していた。

壁にはよくわからない動物の顔が設置されていて、口から大量の湯が湯船に落ちている。さながら小さなマーライオンのようだ。

バスタブの縁からはなみなみと注がれた湯が贅沢にも溢れていた。

… 鏡を見なくても期待に満ちた瞳はキラキラしてそうだ。

早速入ろうとしてハッと我に帰る。お風呂に入るには必ず行わないといけないことがある。

脱衣だ。

… この体になってから… まだ一度も見えていない
アスナ自身の裸を…

… いずれはその時が来る。だがそれは今なのか？こんなところで？

原作を観ていたときはアスナは最も好きなキャラだったが、だからこそ躊躇してしまう。

いつか、俺がいなくなって元のアスナに戻るのではないかと。

その時に見知らぬ男俺に肌を見られたことで悲しむのではないかと思ってしまうと、あれだけ入りたかったお風呂も今は複雑な思いだ。

… だか、この衝動、ますます強くなる。この豪華なお風呂を見れば見るほど入りたくなる。

… … そうだ一度入れれば治るかもしれない。どの道もう限界だ。

心の中で謝りながら、メニューの装備画面の《武器防具全解除》《衣服全解除》《下着全解除》《髪型全解除》を押す。

レイピア、迷宮区内で耐久値がなくなり現在3代目の赤ローブ、くたびれたブーツ、初期装備の衣服、地味な下着が順に消えて… 収納されていく。

その瞬間、全裸の肌に12月直前の冷気が刺さる。

寒さからフルリと体を震わせると、後ろで結んでいた髪がハラリとほどける。

アスナの美しい肢体をあまり意識せずに、体が命ずるまま足先からゆっくりと湯船に浸かる。

「… う… … あ… … あっ… …」

まるで身体中を甘い電流が流れたかのようだ。

吐息が自然と漏れてしまう。

やばい、これはやばい。なにがやばいって… … とにかくやばい。

肩まで全身浸かるとバスタブから勢いよく湯が溢れた。

「… ふ… … あああ… … つ… … …」

気持ち良すぎる

こんなの知ってしまったら戻れなくなる…っ！
なんでこんなに気持ちよく感じるんだ…！

あまりの快感にアスナ^俺はお風呂に敗北したことを悟った。

教訓　：　戸締りは大事

「~~~~~♪」

最高だった。なんで前の俺はお湯に浸かるのをしていなかったの
だろう。

お風呂に関して考え方が180度変わってしまった。

これが良いことなのか悪いことなのかはわからないが、今後お風呂
なしの生活は考えられない。

少なくとも明日も入ることは確実。

今決定した。異論は認めません。

お風呂から上がると1、2分で全身が乾く。

髪も同時に乾いたことを確認すると少し安心する。

女の子の髪の乾かし方なんてよく知らないし、アスナの髪量はかな
りのモノで、お尻付近まである。もし現実なら乾かすのにどれだけ時
間がかかるのか見当もつかない。

その点でVRは楽だ。

自分の裸体に目がいきそうなのを我慢しながら装備画面で入浴する
前にさつき着ていた初期装備を付け直す。

(∴： 明日は装備以外に服も買わないと∴∴∴∴∴∴∴)

髪型プリセットから元の髪型を選択するとよく見るアスナさんに早変わりだ。

この複雑な髪型を作れるイメージが湧かない。

しばらくアスナの中身が俺ならば、この髪型もいつかは自力でできるようにしないとな。

上機嫌でリビングに戻ると

「お風呂ありがとう、キリト…君…:…?」

ソファーに座っていたキリトは一度こちらを見たとおもったら、顔を赤くして気まずそうに俯いた。

???

「…:… どうしたの?…:… なにか変?」

自身の体を見ながら尋ねた。

お風呂に入る前と今の違いは左腰に差してあった武器レイビテと被っていた赤いフードを外しているぐらいだが。

また知らぬ間に俺何かやらかしたか?

キリトはおずおずと話し出した。

「…アスナ、臨時パーティーにならないか…？」

そういうとキリトは俯いたまま、手慣れた操作でパーティー申請を送ってきた。

………え？…ほんとにどうしたんだ?!キリト君がパーティーに誘うなんて……

大ポカをやらかした俺としては、なんとかしてパーティーに入らせてもらえないかと考えていたし、何か違って誘われたとしてもそれは原作通り攻略会議のときだと思っていたのだが……。

どうして急に？

「…それはいいけど、どうして？」

寧ろ願ったり叶ったりだが。

目の前に表示された申請画面の丸ボタンを押す。
すると視界の左端にある自分のHPバーの下に、新たにキリトのHPバーが追加される。
パーティーができた証拠だ。

アスナ^俺の疑問に言い辛そうに答えた。

「あー… ええつと…俺も忘れてたんだけど… こういう部屋って扉に鍵がかけられるんだけど、この部屋借りてるの俺だから俺かパーティメンバーしか掛けられないんだ…」

うん、確か《ツールバーナ》からこの宿に向かってるときに、10日間の前払いをしたとかなんとか言ってた気がする。

「へー、だからお風呂の扉をタップしてもなにも出なかったのね」

風呂場の扉にも当然、鍵は掛けられるのだが、借りた本人でもパーティメンバーでもないアスナにはできなかつた。

借りた本人であるキリトもこれまでソロ活動をしていたため、その仕様を忘れていたようだ。

「それでき… S A O の仕様上、鍵を掛けた部屋はマイナーなスキルを取らない限り、音が遮断されて聴こえないんだけど」

「うん」

「鍵を掛けてない部屋って… その… 音がさ… 普通に聴こえるんだ…」

「…」

「だからさ… さつきまで… 君が入浴してた音と… 声が…」

…別に？中身男ですか？恥ずかしくないし？
どんな声をだしてたか必死に思い出してる訳じゃないし？

「…キリト君」

思ったより低い声が出た。

「は、はい！」

キリトは何かに怯えるように背筋を伸ばし返事をした。

大丈夫、キリト君は優しいから理解^{わか}ってくれる。
ニツコリ笑顔を作る。

「それ、今すぐ忘れてね？」

「え？」

あれ？聞こえなかった？

「わすれてね!!」

「は、はいいー!」

よかった、恩人に拳で記憶消去RTAしなくてすむ。
どうせここ^宿は圏内でダメージにはならないし。

「そろそろ寝ましょ、ありがたく向こうの部屋使わせて貰うわね。おやすみ」

「あ、ああ、おやすみ…」

ニツコリ笑顔を深めながら言うと、キリトは口元を引き攣らせながら返した。

リビングの隣にある寝室の扉を閉めすぐさま鍵を閉める。
一人で寝るにはかなり大きいベッドに腰を下ろし、メニューから俺がアスナになったときに着ていた就寝用の服を装備し直すと、

「あああああああああああああああ!!」

あまりの恥ずかしさからベッドを転げ回った。

なんだこの恥ずかしさ!?俺変なこと言っていないよな?!
変なことは言っていないと思うが、変な声は出した記憶がハッキリと
ある。

聞かれてた!?……………まじかー……………

(あれは自然に出ただけだから!俺は悪くない!悪くない!ないつた
らない!)

疲れきった体でお腹が満たされ、お風呂も入り、かなり眠い筈なの
だが、

悶々としてしまい……………

結局寝れたのはかなり時間が経ってからであった。

存在していた証

ピピピッ…ピピピッ…

あらかじめ昨日の夜に設定していた。アラームが鳴る。深い何かからゆっくり浮上していく。

「…ん…朝…」

目の前にあるアラームを通知するウィンドウを閉じた。

ちよつとしたバルコニーに繋がる寝室のガラス張りの引き戸から朝日が差し、外で戯れているのか小鳥のさえずりが聞こえてくる。

ベッドから降りソックスとブーツ、初期装備の服を装備すると、ぐぐぐと伸びをした。

「…ふ…あ」

自然とあくびが洩れる。

この世界に来て最も良い寝起きだ…。まあ、まだ初日と今日の2回しか経験していないが。

心地よい充足感を噛みしめながら、リビングのドアを開けると

「スー…スー…」

親切なこの部屋の主はいまだ夢の中にいた。

音を立てないように彼が寝ているソファアの向かいに座る。

(…ほんと可愛らしい顔してるな…)

中性的で端正な顔をしているキリトが穏やかな表情でスヤスヤと寝ているところを見ていると改めてそう感じてしまう。

両膝をくつつけて上に肘を寄せ、頬杖を突きながら寝顔を眺める。

(女装をさせたら、映えるだろうな)

本人が聞いたら全力で距離を置かれるようなことを考える。

キリトの弱みを握って脅せばいけるか？だが間違いなく嫌われるだろうし…

なんとかしてキリトを女装させる方法を考えていると、

「…ア、アスナさん？…おはよ…」

不審な気配を感じたのか、いつのまにかキリトが起きている。

「おはよう、キリト君」

ニコリと微笑みながら、

『このままなら銃を使った世界で似たようなことになる可能性が高いから』と自分を納得させながら矛先を納めた。

「美味しそう…」

目をキラキラさせたアスナ。

「だろ？…ここは追加料金を払えば朝飯を出してくれるんだ」

得意げなキリト。

時は数分遡る。

目が覚めたキリトと一緒に一階に降りれば、農家の持ち主である怡幅の良い陽気なおかみさんが挨拶をしてくる。

それに返事を返すとおもむろにキリトはおかみさんに何かを頼み料金を払った。

すると、一度奥に下がり数秒で戻ってきた彼女の手には2人分のプレート。

カリカリに焼かれた厚めのベーコンと上に乗せられた半熟の目玉焼き、脇にはほんのり温められた黒パンとゆらゆらと湯気が立ち昇る野菜スープがあった。

暖炉前の机に置かれるとおかみさんは気楽に食べれるようにかそのまま奥に下がっていく。

キリトは椅子に座り、手を合わせると側にあるフォークを手にベークンを齧り付いた。

「貰っていいの？」

「そのつもりで2つ頼んだんだ。食べてくれないと困るな」

そう言いニヒルに笑うキリトを見て、

「なんかムカつく」

「なんで?！」

愕然とするキリトを横目に彼の対面に座る。

「ならありがたく、ご馳走になるわね」

手を合わせる。

「……」

釈然としないのか微妙な顔をするキリトに笑ってしまいそうになりながら、スプーンでスープを口に運ぶ。

素朴で優しい味がする。薄味なわけではなく野菜の甘みや旨味が引き出されているこのスープは深く身体に染み渡るようだ。

「おいしい……」

「10コルって値段の割にはうまいよな」

気にしないことにしたのか朝ご飯にしては多めの料理を吸い込むように食べるキリトを見て、口が小さくなった今の俺は女の子なんだ

など実感する。

不安は潰えない。

いつか本来のアスナの意識が戻るかもしれない。

そのことは喜ばしいことだが、そのとき…今の俺はどうなるのか。

融合するのか、二重人格のようなことになるのか、それとも…

そもそも姿形が違う今の俺はどれだけ歪な存在なのだろう。

仮想世界での人の可能性が見たくてゲームを開発した、このSAO事件の首謀者である茅場晶彦は、本末転倒なこれを危惧してアバターを現実と同じ姿にしたのだろう。

だが…

「アスナ？どうしたんだ、ボーとして」

「…いいえ、温かい料理は久しぶりだったから」

それでも黒パンを食べたときに脳裏に浮かぶ昨日食べたクリーム乗せパンと、女の子に慣れていないこの心配性な男の子の顔は自分だけのものだ。

一生忘れないだろう。

すでに原作とはズレている今、原作のアスナも知らないキリトのことを知っているのは『俺がいた』という証左である。

「ね、キリト君。昨日話してた『逆襲の雌牛』ってクエストのこと、教えて」

「ああ、あのクリームが報酬のクエな。一つ前の村で受けられるんだけど、少しコツがあつてだな…」

「いつか消えてしまうのだとしても、そのことが少し不安を和らげた。」

《トールバーナ》の道を歩く。

××××××××××××××××××
防具も買った。服も買った。目立つ容姿を隠すフード付きローブも買った。

食料は日持ちする黒パンと皮製の水筒に入れた水を購入。

武器は…今持っているモノと店で売っているモノは性能的にどんぐりの背比べだ。

態々わざわざ買う気にならない。

強力な装備はクエスト報酬、モンスタードロップ、ダンジョン宝箱からの3つがほとんどだ。

俺はずっとダンジョンに潜ってたが、クエストもほとんど受けてなかったし、ドロップ品はあったが俺が装備できないものしかなかった。

宝箱はモンスターしか目に入らなかったのか、そもそも見つけていないのか見た記憶がない。

ないものは仕方ない、幸い今のレベルは攻略組の中でもトップクラスだろうからゴリ押しでどうにかするしかない。

レベルを求めすぎて視野が狭くなっていた過去の自分を戒める。

「どうしようかな…」

やることを全て終えたアスナは^俺これからを考える。

キリトに狩りを止められている以上、圏内を出れない。

町でやりたいことも特にならない。

ふとある願望が生まれる。

お風呂って1日に何回入ってもいいよね？

あーもうそれしか浮かばないわー。だからしかたないわー。

誰にしているかわからない言い訳を思い浮かべながら宿に戻ろうとすると、何かにぶつかってしまった。

「わっ!？」

「おっと、大丈夫か？」

ぶつかった相手を見ると、驚いてしまった。

「ご、ごめんなさい！」

「いや、謝らなくていい。あんたも気をつけてな」

ニカリと笑いながら去っていく背中には無骨で大きな
ツィハンド・バトルアックス
両手用戦斧を装備している。

だがそれすら小さく見えてしまうほどの巨漢、そして一番の特徴であるチョコレート色の肌。

それは原作を知ってる人ならば決して忘れることの出来ないであろう男、声よし顔よし性格よしな黒人・エギルであった。

(そうか、エギルも明日の会議に出るのならトールバーナにいてもおかしくないか!すごい!思ったよりでかい!)

俺は宿に帰ることも忘れ、まるで有名人に会ったときのような高揚感に包まれた。

決意の末

このSAOでは1つのパーティーは最大六人で、各階層のフロアボ
スに挑むときはパーティーが八組の計四十八人の連結^{レイド}パーティーを
作ることができるらしい。

会議に参加するべく黒髪・黒目の片手剣使いとフードを目深に被つ
た細剣使いは、そんなことを話しながら2人でツールバーナの噴水広
場にたどり着いた。

始まるのが午後四時、もうすぐだ。多分、俺たちが最後だろう。

受付していた人に参加人数を訊いた^きキリトは残念そうにため息を
ついた。

今日のボス攻略会議のために、集まったのは四十四人。

おそらくレイド一つも満足にできない人数に不満があるのだろう。

「ん〜？不安なの？キリト君」

「…べ、別に？分配される経験値や報酬が多くなると喜んでいたと
ころさー！」

微妙な顔をしたキリトを覗き込み、意地悪げにニヤニヤしながら言
い放つアスナ^俺を見たキリトは精一杯の意地を張る。

(弄りがいがあるなあ…)

「ぷっ…ふふ…」

思わず笑ってしまう。

「…なんだよ…」

「なんでもないのでーす」

明らかな棒読みの返事にキリトは先ほどとは別種の不満を浮かべていた。

「…」

「ふふ…ごめんごめん、キリト君。説明は向こうでするんだって、いきましょ」

収まるのにしばらく掛かりそうな笑みを噛み殺しながら、『俺不満です』と言いたげな目のキリトの背を押すと、彼は渋々ではあったが大人しく従った。

会議はホールバーナの中央にある窪地、石造りの劇場のような場所で行われるようだ。劇場を中心に半円状に石段が並んでいて参加者は続々とそこに腰掛ける。

俺もキリトの隣に座った。ざわざわとしていた参加者たちであったが、

そこへ注目を集めるように手を叩く音とともによく通る声が響く。

「はいー！それじゃ、そろそろ始めさせてもらいます！」

参加プレイヤーの前に立った鮮やかな青髪のイケメンは、爽やかな笑顔を浮かべながら話した。

「今日は、俺の呼びかけに応じてくれてありがとう！知ってる人もいると思うけど、改めて自己紹介しとくな！オレは《ディアベル》、職業は気持ち的に《ナイト》やってます！」

SAOにシステム的な《職^{クラス}》は存在しない。生産系や交易系スキルをメインにしている者は、《鍛冶屋》や《料理人》などと呼ばれることはあるが、それは自称や他称でありシステムで決まられていることではない。

彼のその冗談に彼のパーティーメンバーらしき集団がどつと沸き、口笛や拍手に混じり「ジョブシステムなんてないだろ！」や「ほんとは《勇者》っていいーんだろ！」といった声が飛ぶ。

きたるべきボスに向けてピリピリしていた空気が変わり和やかなものになった。

1人を除いて…

……俺は……彼を……知っている。

徐々に静かになったところを見計らいディアベルは続ける。

「今日、俺たちのパーティーが迷宮区の最上階への階段を発見した。つまり、明日か、遅くとも明後日には辿り着くんだ。第一層の…ボス部屋に！」

ざわりと周囲がざわめく。

「一ヶ月。ここまで、一ヶ月もかかったけど……それでも、オレたちは、示さなきゃならない。ボスを倒し、第二層に到達して、このデスゲームそのものもいつかきつとクリアできるんだってことを、始まりの街で待ってるみんなに伝えなきゃならない。それが今ここにいるオレたちトッププレイヤーの義務なんだ！そうだろ、みんな！」

ディアベルの演説に再び喝采が起きる中…

俺は…知っている……

原作で明らかにされていないものは多々あるが、それでもわかっていることがある。その一つが……ディアベルの死だ。

元ベータテストターの一人であるディアベルは、ボスのL A、ラストアタック止めの一撃を取り、報酬である強力な世界ユニークで唯一のアイテムを得るために無謀なことをしてしまい……死ぬ。

ベータテスト時と本サービスとの差。変更点。たった一つ、されど最大の違いで死んでしまう。

アスナはベータテストターではないが、俺はテスト時とボスの行動パターンが変わっていることを知っている。

大声の関西弁で放たれた「ちよお待ってんか！」の声も遠くに聞こえる。

俺が誰かに、それこそキリトにでも言えばディアベルの死は免れるまぬがかもしれない。

だが、それは同時に原作の完膚なきまでの崩壊を意味する。

アスナが俺の時点で崩れてはいるが、本来死ぬはずの人間が生きているのは明確な違いになる。

原作で起こった全てがなくなる可能性。ディアベルの死で得た教訓、反省もあるだろう。

それら全てが俺の一言でなくなるかもしれない。

…… どうすればいいか、答えはでない。

関西弁でトゲトゲ頭のプレイヤーと昨日会った黒人エギルが言い争っている。

もし俺がキリトに話したら、未来予知じみた発言をしたアスナ^俺をキリトはどんな目で見るのだろう。

怖い。

俺は……俺は……

「アスナ」

「!?ひゃい?!」

耳元でキリトの声がする。考え込んでしまっていたようだ。

(……………考え込むと周囲が見えなくなるのは悪い癖だな……………)

隣をみるとキリトがびつくりしていた。

「どうしたんだ?!そんな変な声して……………」

「ううん、驚いただけ……………どうしたの?」

「聞いてなかったのか?この場でパーティーを組むことになったんだが、このままだと俺たち二人だけになりそうだ」

焦った顔のキリトは懸念を話す。

周りを見ると元々パーティー組んでた者がほとんどだったのか、すでに気の合う仲間たちとパーティーを組み終えていた。

「……………あー、仕方ないんじゃない?私もあなたもコミュニケーション能力がないようだし」

「ぐっ……………」

露骨に傷ついた顔をするキリトを見てみると、あれだけ荒れていた心が不思議と穏やかな気持ちになる。

どうなるかわからない。答えははまだ出ない。でも……

……この先どんなことがあっても、この人は、キリト君この人だけは

「でも大丈夫。キリト君は私が守ってみせるから」

「……それは男の、俺のセリフだと思うんですが……」

……たとえ俺が地獄におちようとも。絶対に……

愛剣

第一層のボス攻略は8つのパーティーで行われることになった。

重装甲の壁部隊が2つ、高機動高火力の攻撃部隊が3つ、長モノ装備の支援部隊が2つ。

これらはディアベルが指揮しやすいようAとGにナンバリングされている。

そして最後の1つが、ナンバリングすらされていないアスナとキルトのあぶれ組だ。

二人しかいないこのパーティーは原作通り、ボスの取り巻き担当の関西弁ツンツン頭……キバオウ率いるE隊のサポートだ。

つまり雑魚狩りのサブ、雑用中の雑用であり悪く言えば厄介払いである。

今日のところはパーティーの親睦を深めるようになるのか、これで解散らしい。

第二回会議は明日の同じ時間に行われる。

いくつかのパーティーはそのまま酒場やレストランに赴く中、俺たちコミュ障組はおとなく帰路に就く。

夕日に照らされた牧草地を並んで歩いていると、いまだに、こんなにのんびりとして俺はアスナをこなせるのか、彼に付いて行き支えることができるのか考えてしまう。

「…ねえ、キルト君、よかったの？」

「ん？」

「ボス攻略のこと。取り巻き担当のサポートとかボスに触れることもできそうにないけど」

「… そりゃボスを攻撃できたほうがいいだろうけど、2人じゃスイッチしてPOTローテするにも時間が全然足りないし…」

あ…

「… キリト君、明日付き合ってくれない？」

「… え…？」

翌日、俺たちは早朝の森の中を歩いていた。隣を歩くキリトは安心と残念が半々のような顔をしていた。

「… なんだ、パーティー連携の練習のことか」

「… 当たり前でしょ、まったく… 何だと思っただか…」

アスナは呆れたようにキリトに言うと、キリトは不服そうに話す。

「っ… 男ならちよつとのこと期待しちゃうんだよ」

「…へへ、期待してたんだ？」

わかるわかるよ、キリト君！

男つてのは女の子に優しく話しかけられたり、ボディタッチされるだけで『自分に好意があるんじゃないか』って勘違いしちゃうんだよな。

キリトもしっかり男の子なんだなあとニマニマしてしまう。

「…でも、ありがと。手伝ってくれて…キリト君もほんとには迷宮区潜りたかったでしょ…？」

「…うーん、そうしたい気持ちもなくはないけど、パーティーでの戦闘連携は確認しておかないといけないことだったし。ましてやこんなデスゲームになっちゃったしな…。」

「そう…だね…。」

沈黙が流れる。

気まづくなつた空気を変えるためか…あるいは先ほどの反撃なのかキリトが切り出した。

「…ま、まあそれに紳士な俺としてはデートのお誘いは無下にしない主義でね！」

「なっ!?…デ…ッ!?!?」

デート?!これが?いやいやないない!デートつてのは映画館とか遊園地とか…

え?…これってデートなの?狩猟デート??女の子と付き合つたことのないどう…ゴホンゴホン…魔法使い候補だった俺が知らないだけでこれはデートに区分されるの?!

いや!いや!!いゝゝゝゝゝや!!!!

「デートなわけ」「…しっ」…「！」

否定しようとするキリトが何かに気づいたようで、大声を出そうとした俺を片手を上げ制する。索敵スキルに何かが引つ掛かったらしい。

色々言っただけでやりたいけど自分から誘って集中してないのはダメだ。

「…キリト君、これが終わったらデートの定義について話しましょ」

「…お手柔らかにお願いします…」

小声で提案という名の命令をすると、キリトは若干の後悔を滲ませながら苦笑していた。

キリトがモンスターの攻撃を弾く。パリイする

(やっぱりすごい…)

彼が1層を知り尽くしているのもあるのだろうが、寸分の狂いもなく立ち回っている。あまりにも…

「…綺麗」

動画サイトで神プレイを観ている気分だ。

パリイしたキリトはアスナ俺に指示を出す。

「スイッチー」

その言葉とともに駆け出し、武器を弾かれガラ空きのモンスターの弱点にソードスキルを叩き込む。

(…なるほど、これはみんなパーティーを組むわけだ…)

モンスターはHPを全損し砕かれた。

「GJ！流石だな」
グッジョブ

「あなたこそ」

「コツンと拳を打ち付け合う。相棒感あっていいなと少し思っ
てしまふ。」

「それよりドロップアイテム見てみなよ。運が良ければ…。」

メニューからアイテムを確認すると…。」

「これって…。」

表示されていたのは《ウインドフルーレ》というレイピア。

取り出すと全体的に薄いエメラルドブルーでシンプルでありなが
ら美しく、ナツクルガードには植物の蔓の様な文様がある。

これまで武器を持ったときの感情として責任とか怖いを感じるこ
とはあったが、美しいと思ったのは初めてだ。

「その《ウインドフルーレ》は3層中盤まで使える。俊敏性や正確さを
重視する細剣フェンサー使いにはいい剣だよ」

「…そう…。」

知識としては知っていた。原作と同じだったから。

それでも本来のアスナではない俺がここまで心動かされるなん
て…。」

アスナがこの剣に特別な想いを持っていたのもうなずける。

…アスナも…。」

「…キリト君、ありがとう。大切にするね」

「俺は何もしてないさ。君の運が良かっただけだよ」

そうかもしれない。

でも俺の武器が店売りなのに気づいたキリトが武器ドロップしや
すい狩場を選んでくれたのだろう。

不器用な人…。」

試し振りをする、シユカカという風切り音が鳴り響く。
軽い……なのに力強い。

中世の騎士は守るべき主人に剣を授けられたらしい。
当時の騎士たちもこんな気持ちだったのだろうか……

……キリトは守られるほど弱くないけど……

「そうだとしても……ありがとう」

「……どういたしまして、それなら……その……デートって言った件
もチャラ「それとこれは別です」……はい……」

しよんぼりするキリトに悪いとは思いつつも、つつい笑ってしま
った。